

ことを期待していきたいと思っております。そして、私がアメリカの大学生活で得ることができた主流派集団の視点と、その集団に属しては見られない考え方を、将来日本で活かしたいという希望も持ちました。

楓之典君乳母草子

～日々是猫日～ 其ノ捌

猫の起源・進化

中條 恵子 陸自85

猫 猫 猫
— 黒い猫でも白い猫でも鼠を捕るのが良い猫だ—
— 黒い猫でも白い猫でも鼠を捕るのが良い猫だ—

鄧小平氏の言葉として知られていますが、その考え方は猫論（白猫黒猫論、黒猫白猫論）といい、清代の小説集『聊斎志異』（蒲松齡著）の「秀才驅怪」に関する評で、「黄狸黒狸、得鼠者雄」（黄色い猫でも黒い猫でも鼠を捕るのが優れている）と記されているのが初出とされています。

日本へは中国から伝来した猫様。初春を迎える此度は、猫様の起源・祖先と進化をご紹介いたしましょう。

○ 猫の起源・祖先

猫様はもともとは野生動物。しなやかな御身は太古からあまり変わっていません。百獣の王獅子（ういおん）もネコ科ですが、起源を辿ると驚きの事実が見えて参ります。猫様の祖先は現存していることをご存知でしょうか。

私共がよく知っている猫の正式名称は「イエネコ」です。イエネコの直系の祖先は「リビアマヤネコ」と言われ、今でも生息しているのです。

● ミアキス

7000万年から6500万年前、恐竜が絶滅した後も哺乳類などの生物は生き残っていました。最古の肉食性哺乳類は「肉齒類」ですが、6500万年ほど前に「ミアキス」が現れます。肉齒類の絶滅後も約4800万年前まで生息していたミアキスは、体長約30^{センチ}の細やかなる身に長き尾を持ち、鋭い爪と牙を兵器に樹上で暮らすイタチに似た動物と推定されています。ネコ科、イヌ科、クマ科などの食肉目の起源と考えられ、鳥類や昆虫類、樹上生活動物を捕食していたと思われる。

ミアキスの中で森で生活することを選んだ種がネコ科の祖先となり、見晴らしの良い平原で暮らすことを

選んだ種がイヌ科の祖先へと進化していきまます。

● プロアイルルス

ミアキスからは複数の系統が分化していきまます。その中の一つ、約4300万年前に誕生した「プロアイルルス」が、現在のネコ科動物たちの祖先にあたります。

プロアイルルスについては不明点が多いのですが、鋭き爪や歯をもち、より狩に適した身体に進化していたと考えられます。イエネコに比してもさほど大きくなく、短き足に長き胴の、ジャコウネコに近い姿だったとか。

プロアイルルスから更に時代が下って誕生したのが「プセウダエルス」や「マカイロドゥス」（ともに絶滅種）ですが、現在世界中に生息しているネコ科動物は、プセウダエルスから派生していったものと考えられています。

● ネコ科動物の分岐

現在生息するネコ科動物は、祖先の代から分岐し、さまざまな種類に分かれていきまました。

ネコ科動物の分類や分岐の年代についての新発見が続いており、研究者によってさまざまな見解があるも

の、「過去1000万年前後の間に大きく8系統に分かれた」というのが共通認識です。

最も古くに分岐したのは、ヒョウ系統と言われています。その後、小型のネコ科動物「ペイキャット（ポロット）」「オオヤマネコ（リンクス）」「ピューマ」「ベンガルヤマネコ」の系統へと分岐し、最後に誕生したのが「イエネコ」の系統です。

○ イエネコへの進化

ネコ科の祖先の中に、森を追われて砂漠や岩場へ逃れた種がいました。水も身を隠す場所も少ない、厳しい環境で生きる術を見出したのがリビアヤマネコです。環境への適応力に秀でたこのヤマネコの子孫がイエネコなのです。

● リビアヤマネコ

リビアヤマネコは、現在もアフリカ北部一带からアジア西部にかけて生息している小型のヤマネコです。イエネコがリビアヤマネコから進化したものであることは、遺伝子研究の結果によっても裏付けられています。

リビアヤマネコは、いつ頃からヒトと暮らし始めたのでしょうか。

● 壁画と猫墓

・ 古代エジプトの壁画

通説の一つでは、ヒトが猫様を飼ひ付くようになったのは、およそ3500年前の古代エジプト時代とされています。

テーベの墓から出土した「湿原の野鳥狩り」と呼ばれる壁画は、紀元前1400年頃のもので、湿原で水鳥を狩る男性の傍に猫が描かれています。また、デル・エル・メディナの墓地で発見された紀元前1275年の壁画では、人と戯れる子猫が描かれています。これらの壁画が、この頃には猫様がヒトに飼われていた根拠とされています。

・ キプロス島の猫墓

猫様の歴史には、まだ不定な部分もあります。たとえば、紀元前900年頃の猫の歯がイスラエルの集落で発掘されていますが、化石などの外見的な特徴から野生のヤマネコか家畜化された猫かを判定することは、難儀なこととされています。犬さんなどが品種改良によって形態を変えていったのに対し、猫様は野生種と比較しても形態の特徴が大きく

変わっていないからなのです。ところが、2004年に大発見が

ありました。地中海東部のキプロス島にある紀元前7500年ごろの墓から、人骨とともに埋葬された猫の骨が見つかったのです。成人の墓から40cm離れて小さな墓があり、生後8カ月の猫が埋められていました。

キプロス島では、紀元前5000年の猫の骨が過去に発掘されていました。地中海の島々は元来ヤマネコの生息地ではないため、ヒトが船で持ち込んだものと推定されています。また、2004年の発見で9500年前には猫様がヒトに愛されていたことが確認されました。猫様とヒトの歴史が、約6000年近く遡ったのです。

● 自らヒトに接近

犬や馬は、ヒトが統率者の役割をなすことで群れを統制し、飼い慣らすことが比較的容易でした。対して、野生のヤマネコは警戒心が強く、通常は単独で行動するため、ヒトに従わせて飼養することは難しかったでしょう。

ヤマネコはどのようにしてヒトに飼われるようになったのでしょうか。

・ 肥沃な三日月地帯

ナイル川からペルシャ湾にかけて広がる「肥沃な三日月地帯」におい

て、人類が狩猟採集生活から農耕社会へと移行した時期が関係しているのではないかと言われています。

この地域では、約1万5千年前のハツカネズミの歯の化石が見つっています。この化石は、農耕社会以前から、ヒトが採取してわずかながら貯蔵した食料を鼠が狙っていたことを意味します。その後、農耕社会への移行によって、収穫・貯蔵された穀物や種子がより多くの鼠を惹き寄せたでしょう。そして、この地に生息する一部のリビアヤマネコが、鼠や食べ残しを目当てにヒトの近くで生活を始めたと考えられます。

品種改良などによって家畜化された動物とは異なり、ヤマネコは自らヒトに近づいて来たのです。村落の近くをうろつき、鼠だけでなく毒蛇なども捕獲してくれるヤマネコは、自然と人間社会に受け入れられるようになり、互いに必要とし合う共生関係に至ったのでしよう。

・ヒト社会への適応性

リビアヤマネコは分布域が広い種で、砂漠や高原、温帯雨林、平原など、さまざまな環境に対応できると言われています。こうした環境に対する柔軟性や、人類の最初の定住地であ

るメソポタミア周辺を住処にしていたことも、ヒトの社会に滑らかに適応するのに役立ちました。

一方で、リビアヤマネコ以外のヨーロッパヤマネコの亜種はヒトに懐きにくい性質で、たとえ集落の近くに生息していたとしても、ヒトと近やかなる関係を築くことにはならなかったでしょう。

・長い年月をかけて

もちろん、野生とヒトの居住地では環境が全く違います。リビアヤマネコの中でも警戒心が比較的低く、人間に懐きやすい個体だけが、ヒトとの環境に適応していききました。一般的な進化の過程から考えると、そうした個体同士での繁殖が繰り返されることで、更に飼いやすい氣質が強化されたのでしよう。人を恐れない性質が子孫へと受け継がれながら、よりヒトと近い距離で暮らすようになり、現在のイエネコへ変化していったのだと考えられます。

イエネコの誕生時期ははっきりしていませんが、ヤマネコがヒトと関わるようになってからイエネコになるまでには、数千年ほどの長い年月がかかっただろうとみられています。

● イエネコ

白、黒、三毛、虎、サビ、斑、ハチワレなどの日本猫も、ペルシヤ、シヤム、アメリカンショートヘア、スコティッシュフォールド、ロシアンブルーなどの舶来純血種も、一般的な猫様は全てイエネコに分類されます。

イエネコは学術的正式名称で、飼いい猫も野良猫も皆等しくイエネコ。その定義は、「人間によって家畜化されたネコ科の小型哺乳類」。愛玩動物として世界中に広がり、現在の種類は約50種にのぼり、新たな品種も次々生まれています。

○ 楓之典君のつぶやき

―あれもネコ、これもネコ、多分ネコ、きつとネコ：也―



令和7年1・2月号

四十四期

担当者 宮下 典夫
(熊澤酒造助長男)